HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大石高典著『民族境界の歴史生態学 : カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』
Author(s)	近藤, 祉秋
Citation	境界研究, 7, 91-95
Issue Date	2017-03-31
DOI	10.14943/jbr.7.91
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65058
Type	bulletin (article)
File Information	05Kondo.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『境界研究』No. 7(2017) pp. 091–096

［書評］

大石高典『民族境界の歴史生態学：カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』*

近藤 祉秋

本書は、著者が2002年から調査を続けているカメルーン共和国東南部のドンゴ村を対象として、その村に居住する焼畑農耕民バクウェレと狩猟採集民バカの民族間関係(民族境界)の動態を分析したモノグラフである。扱われるトピックは、人間＝動物間の変身や妖術、民族動物学といったお馴染みのものから、換金作物であるカカオの栽培や酒やタバコなどの嗜好品利用に代表される、近年のグローバルな変化をよく表すものまで多岐にわたっている。自著紹介によれば、調査者が現地で関心を抱いたトピックにとにかく首を突っ込んで調べてみる調査方針は、生態人類学者の間では「犬も歩けば棒にあたる」方式と呼ばれているらしい(1)。その表現を借りれば、本書がもつ射程の広さは、著者がドンゴ村とその周りを歩き回る中で当たってきた数多くの「棒」をひとつの枠組みにまとめようとする知的作業の中で生まれたものだと言えよう。本書の章構成を以下に示す。

序章　揺れる境界：自然／生業／社会のねじれ
第１章　ドンゴ村へ
第２章　「原生林」のなかの近代：廃村の歴史生態学
第３章　森の「バカンス」：二つの社会的モード
第４章　「ゴリラ人間」と「人間ゴリラ」：人間＝動物関係と民族間関係の交錯と混淆
第５章　バカ・ピグミーによる換金作物栽培と民族間関係
第６章　嗜好品が語る社会変化：精霊儀礼からディスコへ
第７章　周縁化されるバカ・ピグミー：森のなかのミクロな土地収奪
終章　開かれた境界：自然／生業／社会の広がり

序章では、本書の問題意識と方法論がわかりやすくまとめられている。アフリカでは、農耕民や牧畜民と狩猟採集民とが同じ地域に居住しながら、生業に応じた棲み分けをおこ

＊大石高典『民族境界の歴史生態学：カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』京都大学学術出版会、2016年。
(1)「『民族境界の歴史生態学：カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』大石高典＝著」、アフリック・アフリカ(2016年5月9日)［http://afric-africa.vis.ne.jp/books/books095.htm］(2016年6月9日閲覧)。

DOI : 10.14943/jbr.7.91

なって、独自のアイデンティティを保ってきたことがよく知られている。しかし、著者の調査地では、狩猟採集を生業とするはずのバカ・ピグミーが定住するのみならず、すでに自給用の作物や換金作物を栽培していた。つまり、生業の面では、明確な差異が見出しづらくなってしまっていたのだ。だが、バカ・ピグミーは、バクウェレに同化したわけではなく、両者の間には境界が維持されている。それはなぜなのかという問い(3頁)に答えるため、著者は農耕民と狩猟採集民、両方の視点を意識しながら、歴史的変化や外部とのつながりを軸に議論をすすめると予告する。

第1章では、まず調査地の概況が述べられている。そして、後半ではドンゴ村における生態人類学者の調査について簡単にまとめられている。序章での先行研究の簡潔なレビューとあわせて、本章の内容はアフリカ研究については門外漢である評者にとってもわかりやすかった。本書は部立てされているわけではないが、著者自身述べているように(8–9頁)、市川光雄による三つの生態学的アプローチ[(2)]を意識した章配置となっている。そのため、本書評においてもこの枠組みを参照しながら、評者が興味深く思った箇所を中心に本論の六章分の内容を紹介したい。また、評者の関心が狩猟民社会における人と動物の関係にあるため、それとの関わりが深い前半の三章(第2章〜第4章)を中心的に扱うこととする。

第2章では、歴史生態学的なアプローチから、フランス統治時代の行政文書、聞き取り調査、歴史考古学的とも言える現地踏査の結果を縦横に取り入れながら、カメルーン東南部における商品経済の浸透を論じている。興味深いのは、現地踏査の際に、著者が簡易地図を作成して地名を記録するだけではなく、集落跡に残された植生や遺物にも着目していることだ。調査地では1940年代まで天然ゴム採集が盛んであり、1950年代からカカオ栽培が始まった。その後、1960年代のカメルーン独立にともない、ドンゴ村周辺への集住化がおこなわれ、集落が放棄される。比較的古い集落跡にはゴムとカカオの両方が見られ、石器や儀礼用鉄器もあった。さらにはフランス統治時代のものと見られるビール瓶もあった。新しい集落跡には、カカオのみ見つかる場合が少なからずあり、ホーロー皿や化学繊維製の服など、商品経済のさらなる浸透がうかがわれる、といった具合だ(38–41頁)。このような具体的な遺物や植生の観察が紹介されており、口承史や行政文書だけではわかりづらい実際の生活(の痕跡)を垣間見ることができる。

第3章、第4章では、文化生態学的な観点から、農耕民バクウェレと狩猟採集民バカとが森をどのように利用しているかが紹介され、その経験から他民族の表象が生み出されて

(2) 市川光雄は、人と環境との関係性を考える上で、人々の自然利用における総体を共時的に理解する「文化生態学」、通事的な変化を追う「歴史生態学」、そして、マクロな観点から、外部世界との政治経済的なつながりを踏まえて分析する「政治生態学」という三つの側面を考える必要性を指摘した。詳細は以下の文献を参照のこと。市川光雄「地球環境問題に対する三つの生態学」池谷和信編『地球環境問題の人類学』世界思想社、2003年、44–64頁。

いる可能性を指摘している。第３章では、農耕民バクウェレの漁撈、とりわけ漁撈キャンプでの活動に焦点が当てられる。キャッサバやプランテン・バナナに依存する農耕民は、タンパク源として魚類を重要視しており、乾季と雨季に生じる大幅な水域の変化を利用した多様なバクウェレの漁法はたくみな生態学的適応を示す。一方、乾季の漁撈キャンプへの移動は、異性関係や妖術告発のため、諍いが生じやすい村での生活を一旦離れることで、人間関係の修復や強化にもつながっている(72頁)。バクウェレは普段村では食べることのない「動物の食べ物」(＝野生ヤムイモ)を森のなかでは食べることさえある。著者によれば、バクウェレにとって森とは、集落内では自明であるかに見える人と動物の境界、および民族集団間の境界がゆらぐ場なのだという(82頁)。

第４章では、農耕民と狩猟採集民の民族生物学がひとつの大きな主題である。バカ・ピグミーは、ゴリラを主に儀礼の際に狩猟して食してきた。彼らによれば、ゴリラは農耕民の生まれ変わりである(105頁)。他方で、農耕民バクウェレの側は、狩猟採集民バカが動物に変身して、畑の農作物を盗むことがあると考えている。バカ・ピグミーの子どもまでがゴリラと人間(農耕民)の区別がつかないような絵を描く(108頁)。その一方で、バクウェレは、バカ・ピグミーを侮蔑的に「動物人間」もしくは「肉人間」と呼ぶ事さえある(106頁)。農耕民と狩猟採集民は、「負の表象を投げつけあっている」のだ(107頁)。

この事例が興味深いのは、生業の違いに基づく自然利用の差異が民族間の差異を表現するのにも利用されていると解釈できることだ(119頁)。狩猟採集民バカにとって、ゴリラも農耕民バクウェレも、大威張りして歩き、怒らせると非常に危険な存在である。他方で、農耕民バクウェレにとって、ダイカー（小型のアンテロープ)などの野生動物も狩猟採集民バカも、農耕を知らずに(今では違うが)、彼らが作る自給用の作物をあてにする存在だった。農耕民が、伝統的には農耕を行ってこなかった狩猟採集民を野生動物扱いして見下すと、平等主義的な狩猟採集民社会においては、その威張り方が非常にネガティブに受け止められ、農耕民を非－人間化する言説を生み出す。

上で論じた生業と民族＝動物表象の関係性は、政治生態学的な観点からの議論である第５章、第６章、第７章とも深く関わっている。第５章ではバカ・ピグミーによる換金作物栽培の状況について主に計量的なデータから報告され、第６章では酒やタバコといった嗜好品の製造と利用、第７章ではカカオ栽培をめぐる土地収奪の現状が扱われた。一見すると、森のなかでの活動に焦点が当てられている第３章、第４章とは趣を異にするようにも思われる。だが、当初、前半で扱われた主題に関心をもっていた評者は、後半も前半の議論を理解する上で重要な鍵を与えてくれることに気づいた。

例えば、前述したように農耕民バクウェレは、狩猟採集民バカが妖術を使ったり、死後に転生したりすることでダイカーなどの動物に生まれ変わると考えている(106、111–112頁)。この民俗生物＝人類学理論は、バカ・ピグミーが伝統的には自給用の作物を栽培し

ていなかったことによって、農耕民の視点からは正当化されてきたのだろう。だからこそ、バクウェレのカカオ栽培者は、キャッサバやトウモロコシで作った蒸留酒をバカ・ピグミーにふるまって、農作業の助力を頼むのである。これは、バクウェレの差別的な視点から見れば、畑の害獣に近い存在を益獣に変えるかの如き行為である(147、185–186頁)。

狩猟採集民の側では、炭水化物の供給面で優位な状況にある農耕民の高圧的な態度に反感を覚え、より良い条件を提示してくれるムスリム商業民のカカオ畑で働く者が増えている(148頁)。第5章で論じられるように、バカ・ピグミーのカカオ栽培は、カカオの値段が上がるまで待たずに、少量ずつ安価で現金化して、それをすぐに消費するという即時利得型の傾向が強い(140–145、152–153頁)。それでも、カカオ栽培における優秀な熟練労働者として知られるバカ・ピグミーの経済力はかなり向上したようで、バクウェレから労働交換の一環として地酒を贈与されるよりも、自分で現金を稼いで酒を飲む者が増えてきた。著者はこの傾向を「杯を受けない」態度表明と呼び、バカ・ピグミーのバクウェレに対する対等意識のあらわれと分析している(186頁)。

現在でも、バカ・ピグミーによる自給用作物の農耕は小規模であるため、農耕民が作る地酒は魅力的なものであり続けている(148、173頁)が、商品経済のさらなる浸透によって、主食および地酒の原料である炭水化物の供給という面で有利な立場にあった農耕民の優位性が変化しつつあると言える。つまり、バクウェレの切り札であった炭水化物によって優位性を保つのが以前より難しくなってきたなかで、農耕民が狩猟採集民を「動物」呼ばわりするための言い訳が(そもそも根拠薄弱なのは措くとして)、段々となし崩しになってきているのである。

この点は、終章で論じられる「民族境界の熱帯雨林への埋めこみ」へと接続していくはずだ。著者は、森のなかでの生業を通じた野生動物との遭遇が村のなかでの民族間関係にフィードバックされてゆき、人々が村と森を行き来することでその循環が駆動していくことを論じた(224頁)。これが、狩猟採集民と農耕民との間で生業の違いが目立たなくなったにもかかわらず、境界が維持されているのはなぜか、という本書の問いに対する答えの一部となっている。生業によって民族境界が分かれているとき、それは必然的に森との付き合い方の違いを生む。もし、民族境界が熱帯雨林に埋め込まれているのであれば、焼畑農耕民と狩猟採集民のどちらとも自給用や換金用の作物栽培を行っていたとしても、森のなかでの生活が変わらないかぎり、民族境界は維持され続ける、ということだ。

また、新興集団としてのムスリム商業民は、バカ・ピグミーにとって、農耕民に対する重要なレバレッジ(てこ作用)であるが、彼らはバカ・ピグミーとバクウェレの「トムとジェリー」的関係性(225–226頁)の埒外にあるように思われる。これも、ムスリム商業民が熱帯雨林のなかで活動する頻度が相対的に低いことと何か関連しているのだろうか。

上で述べたことと関連して、本書にひとつだけ注文をつけるとすれば、評者のようなア

フリカ研究の門外漢である読者のためにも、バクウェレ、バカ・ピグミーの動植物利用をできるかぎり網羅的にまとめて、両集団の共通点と差異を検討する章があれば、なおよかったと考える。もちろん、第３章、第４章を中心にバクウェレの漁撈やバカ・ピグミーのゴリラ狩猟など、詳細なデータが提示されているが、ヘビのスープ(219頁)や「コビトワニ、小型ヒレナマズ、ティラピア、タイワンドジョウ、アフリカツメガエル」(67頁)など、もう少し詳しく知りたいと思う部分もある。

本書を通読して、森のなかでの活動に関して、バクウェレは川伝いに漁撈をして移動していき、野営地の近くや焼畑の防御のために狩猟をする一方で、バカ・ピグミーはバクウェレと行動を共にすることもあるが、より森の奥深くでダイカーなどの動物を狩猟することも多いという印象を受けた。欲を言えば、前述した動植物利用の対照表とあわせて、森のなかでの活動領域が違うさまを示す鳥瞰図も提示してあれば、「民族境界の熱帯雨林への埋め込み」に関する議論がさらに説得的になったと考えられる。

ともあれ、本書は詳細な現地調査と丹念な先行研究の読解に基づいたユニークな民族誌であることは間違いない。アフリカ研究や狩猟採集民研究への貢献のみならず、民族アイデンティティや民族境界について考える上でもヒントを与えてくれる「トウガラシがきいている」(219頁)一冊である。